

サムフンズの実験室

-- デンマーク型 近代化をめぐる

名古屋大学大学院情報科学研究科 准教授

小池 直人



長年思想の面からデンマーク社会について研究している。著書に『デンマークを探る』（風媒社、2005年）、『福祉国家デンマークのまちづくり』（共著、かもがわ出版、2007年）、『デンマーク共同社会の歴史と思想』（大月書店、2017年）など多数。

「大学の〈知〉の現在を考える」名大アゴラ・連続セミナー（第14回）より

はじめに

みなさん、雨の中おいでいただきありがとうございます。私は情報学研究科に所属し、社会思想、社会文化を研究しております。2017年に『デンマーク共同社会（サムフンズ）の歴史と思想』という本を出しましたので、今日のお話はその内容に関係するものになります。もっとも、デンマークは遠く離れた国ですから、その研究が現代日本の社会・政治状況と直接的に関連するわけではありません。ですが間接的に、民主主義や平和主義、社会福祉などへの示唆を探ることは意図しております。少々理屈っぽい内容になるとは思いますが、ご寛容をお願いします。

さて、デンマークは地理的な距離もさることながら、面積は九州ほどの大きさで、人口も570万人程度で、よく兵庫県くらいといわれます。小国です。社会環境も福祉国家であり、私たちのそれとは大きく異なります。しかし、この国は愛知県ではお馴染みです。おおよそ100年前に、碧海郡安城町周辺で「日本（の）デンマーク」と銘打って豊かな農村づくりが進められていたことは、年輩の方ならよくご存知でしょう。その当時、こうした農村振興との関連でかなりたくさんの本が出されていて、私は以前、農学部の図書館や安城市の図書館で見たことがあります。ですが、現在のデンマークはかつての農業国とはちがった国柄になっています。国土の6割程度が農地で、食料自給率が100パーセントをはるかに越えて、農産物は他国に輸出されているのですが、GDP比ではおおよそ5パーセントの割合にすぎず、就労者に占める農業人口の割合は約2パーセントとたいへん少なくなっています。工業も、現在では就労者全体の2割程度となりますので、7割以上の方は第三次産業人口に属し、しかも顕著な特徴として就労者の3割弱が公共セクターで働いています。そうした意味で、世界の流れで「先端」を行く国といえるかもしれません。統計的にはいろいろありますが、今日のお話での問題はこの国が今、「世界一仕合せな国」といった枕詞をもらって紹介されていることです。じっさい、国連の『世界幸福度報告』でも2016年に第一位、2018年には第三位にランクされています。10年以上前の2006年にも、イギリスのレスター大学の研究者の調査でトップはデンマークでした。ですから、つねにトップ・クラスの「仕合せの国」ということができ、快適で親密な雰囲気を表現する「ヒュッゲ」(hygge)ということばが輸出され、テレビなどでもよく紹介されます。しかし、少し冷静に考えると、仕合せとか幸福とかは、主観的な気分や雰囲気のことですが、そうした気分になるのは親密な人間関係だけが原因ではなく、むしろその背景としての社会制度も考えなければなりません。直截に言えば、デンマークは制度が生活を安定させ、ゆとりを生んでいる典型的な福祉国家であり、しかも、その充実のためのたたかいが長年続けられてきたのです。まずこの点をきちんと見すえることが、私には肝心

だと思えます。

ところで、福祉国家はその必要性が今日しだいに明らかになってきていますが、しかし昨今の新自由主義思想の広がりのおかげで「遅れた制度」というイメージも押し付けられてきました。たとえば、イギリスでは戦後「揺り籠から墓場まで」のスローガンが福祉国家の合言葉として語られたわけですが、とくに1970年代末のM・サッチャー政権の登場以後、「イギリス病」のようなレッテルにおき替えられ激的な解体政策が進み、今では福祉の国というイメージは薄らいでいます。たしかに、戦後つくられてきた制度に問題なしというわけではありません。国家財政の圧迫や官僚主義の病弊があったことは否定できません。しかし、福祉国家のイメージをそうした一面的な理由で片づけることは到底できません。この制度は改良しながら高度化させられますし、実際にそうした仕方で問題対処がなされれば、最高度に安定した生活をつくりだすことができるからです。そのことを示す好事例が「世界一仕合せな国」デンマークなのです。私は、小国というレッテルで片づけられ、これまで日本でほとんど研究されていなかったデンマークについて、この間いろいろ学んできました。そして高度な福祉国家の成功の背景に、「サムフンズ」といわれる共同社会があり、その維持努力がなされてきたこと、その社会が発揮する力は半端ではないことなどを確信するに至りました。今日はこのことの一端を紹介させていただきたいと思えます。

1. 近代化パターンをめぐって

さて、ここ数十年の時代の変化、とくに世界の新自由主義的再編の結果、生活の荒廃が急速に進み、新自由主義的発想とは異なる社会への関心の高まりから福祉国家も改良され、新福祉国家や社会投資国家といった呼称も頻繁に用いられるようになりました。しかし、一概に福祉国家といっても広く世界に分布しさまざまです。この多様なあり方を類型化し、その発展を考えるために貢献をしている書物として、G・エスピノー-アンデルセンの『福祉資本主義の三つの世界』があります。ここではごく簡単に紹介するのですが、彼は「脱商品化」、「階層化」といった指標を用いながら、福祉国家を促進する政治的権力資源に着目して福祉制度を政治的レジームによって分類しました。自由主義と保守主義、社会民主主義といった3類型がそれぞれです。これらの類型は、地理的な位置からアングロ・サクソン、大陸ヨーロッパ、北欧等のような呼称でいわれる場合もありますが、デンマークは社会民主主義レジーム、あるいは北欧グループに属します。このグループの代表例はスウェーデンで、これまで北欧諸国のなかでは最も研究の蓄積がある国です。ですから、日本では北欧といえばスウェーデンというのが一般的でしょう。しかしデンマークはといえば、いろいろな紹介書はありますが、社会の研究書といえるものはこれまでほとんどありませんでした。そうした事情で、かつて私もそうでしたが、デンマークは農業国で古い伝統が残存し、近代化の遅れた国といったイメージをもつ方がまだたくさんおいでかもしれません。

しかし、それはやはりかつての見方で、すでにお話したようにこの間すっかり変わりました。じっさい、デンマークは20世紀末の段階で、世界で最も成功した国、21世紀のひとつのモデル国家といえることができます。これには幸福度、社会福祉から、環境保全、経済的安定性、政治的民主主義の成熟など様々な面で説得力があります。そのことを可能にした条件としてサムフンズがあるといいたいのですが、私はここでそれを三つの近代化パターンの一つとして数え上げて見たいと思えます。三つのパターンとは次のものです。

- ・自由市場主導型
- ・国家主導型
- ・サムフンズ主導型

順を追って簡単に説明しましょう。第一の自由市場主導型とは、社会が国家や政治制度から相対的に独立した仕方で発達するパターンで、自由主義的特徴をもった諸国を典型として展開されます。たとえばイギリスは、17世紀に市民革命を経験し、絶対王政が廃止され、議会を中心とする制限王政になりました。そのさい国家（政府）は社会の自由を制限するとみられ、J・ロックの社会契約論のように、政府の制限と並行して市民のおよび社会的自由が保障されます。近代的な市場経済はこうして多種多様な団体の活動を発達させたわけです。それは一方で、近代科学の成果を応用する仕方で急速な工業化を成し遂げ、ナショナルな市場を形成し、さらにそれを世界市場へと展開して大英帝国の世界支配をもたらします。また他方で、そこでの国家の社会介入が小さい分だけ、伝統的な身分にまつわる遺物が残存し、また近代的な資本主義の悪弊を世界規模で格差や貧困などのかたちで温存し、深刻化させました。近代化は資本の強力な文明化作用を解放したのですが、格差や貧困のある分断された階級社会の特質を顕著な仕方で露呈します。近年、新自由主義がこうしたモデルの優位性を高唱し、問題を無視して強権的にそこへの回帰をめざしていることは周知のことといえます。

二番目の国家主導型パターンは、自生的な市場や社会の発達に出遅れ、「先進国」のから遅れて遂行される「後進国」の近代化で、国家エリートが音頭をとって「上から」近代化が推進される場合です。この点は、日本がドイツを学んだことはよく知られています。ドイツは英仏などに比べて相対的に近代化に遅れ、18、19世紀を通じての学術・文化発展や啓蒙の専制政治のなかで近代的大学を設立し、普遍的学問（ディー・ヴィッセンシャフト）を修めた秀逸な教養市民層を輩出します。彼らは国家官僚や大商人、学者、聖職者、

法律家、医師として実質的に社会をリードし、民衆を教育する役割を担いました。「知性の上に建てられた」プロイセン＝ドイツ国家は、哲学者ヘーゲルによって示唆された福祉制度を、保守的な「アメとムチ」というビスマルクの仕方で整備し、世界で最初に社会保険制度をつくりました。それは急激な近代化と軍事帝国主義に道を開きますが、このモデルが日本にも受容され、しかも福祉国家抜きの軍事帝国の創出となり、第二次大戦によって崩壊します。とはいえ、このモデルは現在でもかたちを変えて継承されているといえます。この場合、政治は往々にしてエリートの独占物となり、民主主義とは相反する階層秩序を残存させることになるのです。

おそらくこれまでの日本ではこれらの二つの近代化モデルの狭間で議論が活発になされてきたでしょうが、私がここでお話しする第三のサムフンズ主導型は、比較的「辺境地域」にある国々の近代化の別パターンともいえます。このパターンは、一方で市民社会の活発な活動、たぶんに非営利的で国民的規模に組織された多様な団体結社（アソシエーション）の活動、他方で合理的で、相対的に階級中立的な国家の二本柱が連携します。両者は対立しつつもパートナーとなり、社会の底辺への生活支援と知的、文化的改革を推し進め、20世紀にいたって民主主義的福祉国家あるいは新福祉国家を創出していくのです。こうした整理を仮説としてご理解していただいたうえで、以下サムフンズの特徴について少し詳しく考えてみます。

2. サムフンズとその発展

ところで、サムフンズの原語はデンマーク語の〈samfund〉ですが、文字通りには共通のつながりといった意味で、ノルウェー語やスウェーデン語にもそれぞれ〈samfunn〉、〈samhälle〉といった類義語があり、通常は英語で〈society〉、私たちのことばでは「社会」と訳されています。しかし、これらのことばはサムフンズの中身を十分表現できません。とりわけ、伝統的には国家と社会は区別されてきました。とくに自由主義的発想ではこの区別が重要なのですが、サムフンズには区別とともに両者の関係性も含まれてきます。さらに別の文脈では、ゲマインシャフトとゲゼルシャフト、コミュニティとアソシエーションなどの区別が人口に膾炙しています。ですが、やはりサムフンズはこれらの両方の要素を含むものです。ややこしい言い方ですが、区別されたもの同一、これがサムフンズの特質であり、この点をここでは架橋機能、社会発展、人間形成の三つの面からお話しします。

まず、架橋機能についてです。かつて伝統社会のなかに統合されていた諸機能は近代化、現代化とともに分化します。経済と政治が、またそこから社会諸団体が分かれていきますが、そのことで、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトといった概念区別が生まれます。とくに後者は往々にして不均等に発展し、支配的集団と被圧迫集団、巨大集団と弱小集団のような差異を生み、それらが機械的に関係づけられます。強者集団が弱小集団を支配し、弱者は強者に従属させられてしまいます。かつての時代はともかく、今では社会ということばは、こうしたゲゼルシャフトのイメージで思い描かれる傾向が強くなりました。もっともその動向には歴史的必然の面があり、それはこれからも継続するでしょう。しかし、サムフンズにはこうして不均等に分かれた集団力学の世界にたいして、諸集団を再度、対等平等かつ有機的に結びつける精神的作用、比喩的には「愛」ともいわれる倫理的作用が込められます。この働きが私のいう架橋機能です。

たとえば、障害者福祉の分野で生まれ、高齢者福祉においも応用されるノーマリセーリン（ノーマリゼーション）ということばがあります。これは

N・E・バンク-ミケルセンという提唱者によれば、社会が健常者と障害者に分かれた状態、たとえば後者が施設に隔離され、健常者とは異なった生活スタイルを強要される状況から脱却し、平等な人間関係と共通の生活条件を確保するよう可能なかぎり努力する運動のことです。この運動の結果、デンマークでは障害者福祉や高齢者福祉の領域で脱施設ケア化が進み、在宅ケア、コミュニティ・ケア等に移行し、通常の市民としての生活と並行して福祉的ケアを受けることになっていきます。そのさい運動は一方で障害者・関係者が団体を構成して他の団体組織と連携しつつ、公的機関へと共通要求を提出し、協議して政策決定にコミットするのですが、他方で公的機関は、そうした要求に公共性を認め、政策を改良し、そのことで社会そのものを変化させます。そこに生まれる双方向の関係（共同化）にサムフンズの具体的な働きがあるのです。

このように分かれた社会の架橋あるいは有機化・共同化がサムフンズの働きであり、またその目標です。それは団体（アソシエーション）としてまず18世紀に国家公認の農業団体、農家協会というようなところからスタートしました。哲学者キルクゴールはそれを大衆とか群衆のような没主体的人間集団として否定的に見たようですが、詩人のN・F・S・グルントヴィはその積極面も受け止め、「デンマーク（語）協会」（デ・ダンスケ・サムフンズ）を立ち上げ、サムフンズを国民的団体として提起しました。しかし彼の貢献はこうした団体内を、また団体相互の関係をことばを通じて協議・調整する国民的政治的文化に、その文化を担う人間の発達の形成に影響を残したことです。この点は次節でも少しふれます。ここで押さえない肝心な点は、サムフンズがたんに団体ではなく全体社会、国民社会につながる「民衆的国民諸運動」として展開したこと、さらに20世紀以降、福祉国家の経済的再分配機能と結び着くようになったことです。以下この経済的機能にかかわって二点ふれておきます。

第一に、この発展かかわって決定的だったのは、20世紀への転換期に労使間の紛争を自主的に解決し、社会の絆を再び縫い合わせる枠組みがつくりだ

されたことです。その顕著な事例が、1899年に、いわば総資本と総労働との3か月にわたる階級対決を経て到達した「9月合意」でした。そのさいに労働運動のナショナル・センター（L O）と資本の連合組織（D A）が一方で資本の経営権を承認し、他方で賃金や労働条件にかかわっては、両組織が協議し決定する枠組がつくられ、労使は社会的パートナーとなって、紛争もその解決もルールに基づくものになっていきます。さらに今日まで続いていることですが、紛争が混乱し、また長期化したさいに国家が介入して仲裁、調停役をととめる三者参加の協議枠組もこの後にできてきます。私はこうした協議枠組をデンマークの現代的サムフンズの定礎と考えます。重要なことは、一方でこの枠組みが社会内の関係調整手段として模倣され、広く普及しただけでなく、経済政策、福祉政策、技術政策、環境政策など公的な政策決定や経済的資源配分にも影響力をもつようになり、そこへの参加者に新しい諸団体を加えて拡大していったこと、他方で、その枠組はミクロの面で、自治体やコミュニティー、公的施設の運営などへと浸透したことです。「大きな」公共部門が効率的かつ民主的に機能するのも、この協議枠組みの良い意味での合理性によります。近年の話題では、こうしたサムフンズ枠組が各種の国際競争においても制度的優位を発揮するという議論さえ出てきているのです。こうしてサムフンズは団体活動から公共の制度へ、アソシエーション的なものから経済的再分配を含むコミュニティー的なものへ機能領域を拡大し、その存在意義を実証してきた、いいかえると、サムフンズの歴史はあるべき社会関係の発展のための実験室の役割を担ってきたといえるのです。

第二に、福祉国家の民主主義にかんしてふれておきます。お話しのはじめに、デンマークの福祉制度は社会民主主義レジーム、あるいは北欧モデルに属すると述べました。このモデルは、福祉財源の大部分を税で賄うことに特徴があり、教育や医療はほとんど自己負担が要らず、さらに多様な公的サービスが整えられるなど再分配機能をかなり徹底しています。しかしそのためにしばしば高税が問題にされます。たしかに、所得税は平均50パーセント、付加価値税（消費税）が25パーセントで、この点からすると賃金も高

いが税金や物価も高いといえます。この高税はつねに不満や議論の対象となりますが、それでも市民生活にきちんと再分配されているため、福祉国家への支持はおよそ9割の市民に及ぶそうです。国家や地方自治体など公的機関への信頼性は高く、公務員にたいする信頼性も高いのです。何といても、公的機関で働く労働者の比率が2015年のOECDの統計でフランスの約21パーセント、アメリカの約16パーセント、日本の約6パーセントにたいして、デンマークが29パーセントとなっていることはそのことを如実に物語っているといえるでしょう。

しかし、繰り返しになりますが、こうした高度な公的福祉制度は、たんに国家によるだけではなく、諸々の市民団体、とくにナショナルな規模で活動する団体活動の帰結でもあり、それらの両者が「二頭立て馬車」のようにして福祉制度を牽引するのであり、そのことを通じて危機や試練に対処し、サムフンズの内実進化を遂げてきたのです。先に「サムフンズ主導型」としたのはそうした意味においてです。ちなみに、政治史家のT・クヌズセンは、こうした近代化が可能になった条件として、デンマークの国家が絶対王政以来、中立度合いが高く、汚職の度合いが低いこと、理性的で農奴制廃止、絶対王政廃止、植民地の放棄や奴隷制度の廃止などの改革を自発的に行ったこと、すなわち絶対王政でさえ、「世論に統治された絶対王政」だったことを指摘しています。このことは国家政策がたんに進歩的国家官僚層の発案に由来するだけでなく、市民社会の自発的運動の諸要求に対応してきたこと、換言すれば市民団体の活動からのボトム・アップに依拠したことを意味します。一般に北欧諸国の団体活動は活発で、今日でも市民一人当たりで三つか四つの団体（アソシエーション）に参加しているといわれますが、サムフンズの発展はそうした歴史の帰結ということもできるのです。

3. サムフンズの人間形成

これまで私は、サムフンズの関係と活動が自発的団体結社の叢生から出発して、それら相互関係の連結、福祉国家の形成、公的政策決定への参加、コミュニティの生活枠組、生活形式への浸透として進化したことにふれました。そこで最後にサムフンズの理念的背景、とくに人間の発達の形成についてのお話を補足したいと思います。

すでにデンマークの福祉国家が社会民主主義レジームに属することにふれましたが、このこととの関係でいえば、マルクス・エンゲルスらの科学的社会主義のデンマーク版は社会的、政治的に大きな影響力を現在にいたるまで維持しています。じっさい、この系譜につながる社会民主党、社会人民党、赤緑統一リストなどの諸党の議会での議席占有率は3割弱を占めます。とくにその中心に位置する社会民主党は現在も単独では第一党で、20世紀の大半の期間に政権党の位置にありました。しかし、同党は他のヨーロッパ諸国の事例と異なり、第一次大戦にコミットせず、対外的に中立平和主義、対内的には議会制擁護に徹して福祉国家形成に指導的役割を果たしました。

また、その政治を支えた労働組合の組織率がたいへん高いことにも注意が必要です。北欧諸国はどこでも高いのですが、デンマークでは以前よりやや減少したものの7割近い労働者が職種別、産業別のユニオンに組織されていますし、じつに2000年ころ発行された学術書には公務労働者のほぼ100パーセントが組織されていると書かれています。先に述べたエスピン・アンデルセンはこうした重厚な政治権力資源もあってデンマークを社会民主主義レジームに分類しました。近代化と福祉国家形成にあたって、この権力資源を勘案することは、今日のデンマークを理解するうえで必須の条件であり、このことを考慮しないとさまざまな誤解が生まれることになるでしょう。

とはいえ、1980年を前後して、経済のグローバル化と新自由主義の嵐が吹き荒れ、福祉国家は危機に立たされました。たしかにそれ以後の時期には政権も中道左派連合と右派連合が交代で担うようになり、労働組合の力もやや低下しました。とくに古い形態の社会主義イデオロギーは後退を余儀なくさ

れています。このような変化のなかで、なぜ、どうして新自由主義の大波に抗して高度な福祉国家が維持され、経済的にも生活の上でも「世界一仕合せな国」が可能なのか、このことは研究上の基本的な疑問であり課題です。この点で私は、サムフンズの人間学、人間形成を考えることが解明の鍵ではないかと考えています。この関連でいえば、近代デンマークには、マルクスの『経済学・哲学手稿』に論じられる人間の発達の形成とかなり類似し、しかし土着的で、独自の視点も保持するデンマーク版人間・社会形成論が有形無形に存在していることに注目できます。これは理念的な面ではとくに近代「デンマークの国父」とさえいわれるグルントヴィ（N. F. S. Grundtvig, 1783-1872）の貢献にかかわることなのですが、グルントヴィとマルクス、いいかえると自由主義と社会主義の思想的共振関係のなかで人間の発達の形成が制度的に、つまり法制上も生活スタイルとしても具体化されてきたのではないかと仮定し、検証したいと考えているところです。

そこで、グルントヴィについて簡単に紹介しておきましょう。グルントヴィは100年ほど前の日本ではかなりの有名外国人で、国民高等学校を構想した人物として知られていました。彼はルター派国教会の聖職者であり、独特の民衆自由主義者です。面白いことに地図上で福祉国家が発達した国々は宗教的にはかなりの部分がルター派プロテスタンティズムの普及した地域と重なっています。北欧諸国についてはいずれもルター派で17世紀以降に救貧制度ができ、教会が国家の下部組織としてその任に当たりました。グルントヴィはその一聖職者でしたが、しかし、むしろイギリス救貧制度を監獄のようにきわめて非人間的な生活を強制するものとして嫌悪し、救貧を自発的な民衆の「愛」の絆によるべきと考え、憲法制定議会でも救貧の法制化に反対の弁を振るいました。この意味で彼は自由主義の時代を生き延びた人であり、福祉価値を称揚するとしても非福祉国家論者です。グルントヴィの時代的制約は否めないであり、彼の過剰評価は慎みたいと思います。ですが、ややこしいことに、現在ではそのグルントヴィが福祉国家の貢献者のようにいわれます。この逆説の理由と意義についてはきちんとした研究が必要なので

すが、ここでは立ち入らず、むしろ彼の人間論にふれたいと思います。

さて、グルントヴィは19世紀という、対外的に国家主権が危機に立たされた時代に、「デンマーク（語）協会」（デ・ダンスケ・サムフズ）という自発的団体を他の有力知識人とともに立ち上げました。この団体は、市民的連携により知識人たちが一般参加者に向けて講演を行う政治文化的アソシエーションでしたが、その精神は後に国民高等学校運動に結実し、さらにその枠を越えて国内に普及していきます。今日では「デ・ダンスケ・サムフズ」は一般化して「デンマーク社会」という意味になり、言語や文化のみならず、政治的な相互関係や経済的資源の生産や流通、再分配にもかかわっています。このことは自由主義的概念として出発したことばが社会主義とも結合していったことを示すものです。

とはいえ、グルントヴィの貢献の核心はむしろ人間の発達の形成論です。彼自身は、時代の子としてフランス革命に大きな影響を被り、その理念を暴発的な急進革命ではなく別の仕方具体化しようとしてきました。彼は「世論に統治される」絶対王政の支持者でしたが、しだいに民主主義の歴史的趨勢を理解するようになり、その時代にふさわしい人間形成を、シェラン島の中部にある小都市ソーアの国民高等学校（フォルケリ・ホイスコール）の理念として提起し、実現しなかったものの、国立学校のかたちで具体化しようと努力しました。国家官僚や法律家、医者、大学教授などからなる教養市民層と小農民を中心とする一般民衆とを平等な「民衆的国民」（フォルケリヘズ）として結びつけ、諸問題を母語による話し合いで解決する政治文化を育てようとしたのです。この議論の核心には、つねに文字の文化（リテラシー）よりも、声の文化（オラリティー）とコミュニケーション的共同関係の強調があり、このことが、民主主義を議会での多数の横暴ではなく、合意形成としてとらえるコンセンサス・デモクラシーの発達を後押ししたことはいうまでもありません。

ちなみに、デンマークの社会主義は、マルクス・エンゲルスらによってロンドンで設立された国際労働者協会（第一インターナショナル）の支部とし

て、当初革命路線を展開しますが、しだいに議会を重要な政治制度と認定し、改革路線へと転換していきます。このことはグルントヴィの思想がそこに浸透したことを物語ります。マルクスも新しい人間の共同と発達を重視します。そこに「声の文化」の論点はなくはないでしょうが、強調されたとはいえません。しかしこの文化がデンマークの民主主義、社会主義に独自の質を与えていったことは歴史的に検証できると思うのです。

おわりに

以上、デンマークを事例としてサムフズ主導型の近代化を、架橋機能、社会発展、人間形成にかんしてお話してきました。大まかである上に、主観的な研究関心が出すぎて、お聞き苦しかったかもしれません。この点にご容赦をお願いします。ただ私自身は日本と離れた北欧の小国のなかに、今後めざし、作りだすべき共同社会の理念やエッセンスが隠れていると確信しています。それを深めてサムフズの哲学として解明することが現在の抱負で、このテーマにこれからもこだわっていくつもりです。ご清聴ありがとうございました。（小稿は、2018年9月29日に名古屋大学アジア法交流館でおこなわれた「名大アゴラ第14回セミナー」でお話したものを修正し、加筆したものです。）

【参考文献】

- エスピン-アンデルセン、G.（2001）『福祉資本主義の三つの世界——比較福祉国家論の理論と動態』（原著1990年、岡沢・宮本訳、ミネルヴァ書房）。
- 岡田洋司（1992）『ある農村振興の軌跡——日本デンマークに生きた人々』（農山漁村文化協会）。
- 小池直人（2005）『デンマークを探る（改訂版）』（風媒社）。
- （2017）『デンマーク共同社会（サムフズ）の歴史と思想——新たな福祉国家の生成』（大月書店）。